５月３日（日）サムエル記第二７章４～７節

「わたしがイスラエルの子らのすべてと歩んだところどこででも、わたしが、わたしの民イスラエルを牧せよと命じたイスラエルの部族の一つにでも、「なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか」と、一度でも言ったことがあっただろうか。」（７節）

その日の夜に預言者ナタンに主のことばがありました。５節「行って、わたしのしもべダビデに言え。『主はこう言われる。あなたがわたしのために、わたしの住む家を建てようというのか。」とありますが、ここでのあなたとはダビデのことです。ですから、主はいわゆる修辞疑問文を使いながら、婉曲的にダビデが主のために宮を建てることを禁じているのです。６節で主は出エジプト以来、家、すなわち宮として建てられたような場所に住んだことはなく、天幕（幕屋）にいて歩んできたのだと言います。逆に７節で「わたしがイスラエルの子らのすべてと歩んだところどこででも、わたしが、わたしの民イスラエルを牧せよと命じたイスラエルの部族の一つにでも、「なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか」と、一度でも言ったことがあっただろうか。」と言います。これはいわゆる反語と呼ばれる表現方法で、必ず否定的な答えが返ってくることを期待しての疑問の表現で、一度も主は「なぜあなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか」と一度も言ったことがありませんとの答えが必ず返ってくるはずだということです。そして、なぜ主がこのようにナタンを通してダビデに伝えようとしているのかと申しますと、神殿を建てることによって他の偶像の神々と同列視されることがないようにとの意図とともに、サイラス・ゴードンという学者は、周りの国々と同じような物質主義に陥ることを警戒したのではないかと指摘します。つまり、立派な神殿を建てることが目標となり、神殿が建てられることで満足してしまっては、本来の信仰とはかけ離れてしまいます。

私たちも、ダビデが主のために神殿を建てようとしたように、主のために何かをしようとすることは大事なことですが、主のみこころとは違ったものになってしまってはいないでしょうか。そして、主のためと言いつつも、いつの間にか自己満足にすり替わっていることはないでしょうか。

５月４日（月）サムエル記第二７章８～１１節

「主があなたのために一つの家を造る、と。」（１１節）

５節で「行って、わたしのしもべダビデに言え。」と言われた主は、８節で再び「今、わたし

のしもべダビデにこう言え。」と言います。まず「わたしはあなたを、羊の番をしていた牧場から取り、わが民イスラエルの君主とした。」と言います。これは６章２１節の「むしろ私を選んで、主の民イスラエルの君主に任じられた主の前だ」にも呼応していますが、ダビデが羊飼いからイスラエルの君主に任じられたのは、主の選びによる油注ぎがあったからです。９節ではダビデが戦いにおいて勝利を得ることができたのは、ダビデがどこに行っても、主がともにおられたからであり、主が敵を断ち滅ぼされたからです。１０節で、主はイスラエルの民をカナンの地へと導き入れて、そこに住むようにしてくださり、「もはや恐れおののくことのないように、不正な者たちも、初めのころのように、重ねて民を苦しめることのないように」守ってくださったのです。１１節で「わたしはあなたにすべての敵からの安息を与えたのである」と言い、そして最後に「主があなたのために一つの家を造る」と言われます。ダビデが主のために住まう家を建てるのではなく、主がダビデのために一つの家を造るというのです。それは、この後続いていくダビデ王朝を指しています。

私たちも主のために何かをしようと考えるなら、まずは主が私たちのために何をしてくださったか、どれほど多くの恵みをもって導いてくださったかを考えるべきです。主は私たちを罪から救い出してくださり、恵みをもってクリスチャンとしての私たちの人生を導いてくださいました。私たちが主のために何かをしたというよりも、主が私たちのために常に大いなることをしてくださったのです。そのようにして、主が恵みをもって私たちを導かれる中で、主が私たちを用いられ、私たちを通してご自身の栄光を現わそうとされるのです。ですから、私たちは人生の主導権を自分が握って、自分が主のために何をするか考えるよりも、主に私の人生の主導権を明け渡して、主が私に何をしてくださるかを待ち望みましょう。

５月５日（火）サムエル記第二７章１２，１３節

「彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」（１３節）

１２節「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき」とは、ダビデが地上の生涯を終える時ということです。実際に私たちが臨終の床で何を思うのかは分かりませんが、自分の家族のことであったり、これまで自分がしてきたことなどを思い出すのかもしれません。ダビデに対して主は、彼の亡き後、「あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」と約束してくださっています。このことはダビデにとってどれほど大きな慰めだっただろうかと思います。私たちも、この地上を去る時には、すべてのものを後に残

していかなければなりません。やり残したこともあるでしょう。悔いが残ることもあるかもしれません。しかし、すべてを主の御手にゆだねましょう。主が私たちの不完全を完全にし、私たちの未完成のわざを完成させてくださることで、主はご自分の栄光を現してくださいます。そのようにして主は常に私たちに対しても恵み深くあってくださるのです。

１３節の彼とはダビデの後に起こされる世継ぎとなるべき人物ですが、その者が「わたしの名のために一つの家を建て」と言われていますが、この後ダビデの息子のソロモンが主の名のために神殿を建てます。そして「わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる」と言われます。１２節でも主が「あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」と言われています。これまで歴史を見ていくなら、古今東西さまざまな王朝が現れては消え、消えた後に別の王朝が現れるということを繰り返してまいりました。その中で、どの王朝もどうすれば王朝が長く続くかということに為政者は腐心したことだろうと思います。しかしダビデの王朝に関しては、人が自分の能力、策略、軍事力などによって王朝を維持するのではなく、主が王国を確立し、彼の王国の王座を堅く立ててくださるのです。ある意味、ダビデにとっては自分の亡き後の将来ことについては、自分ではどうすることもできず、主にゆだねるしかできませんが、その主が王国を確立されるとは何と幸いなことでしょう。私たちも将来のことは分かりませんし、主にゆだねるしかありませんが、主がすべてを最善にしてくださることを信じましょう。

５月６日（水）サムエル記第二７章１４～１７節

「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」（１６節）

１４節「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」とありますが、神ご自身が世継ぎとなる王と父子関係を結ばれるというのは、驚くべき特権です。もちろん後に続く世継ぎの王たちが主のみこころを正しく行う者たちばかりではないことは主がよくご存じでした。ですから、「彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」とありますが、異邦人との戦いに敗れることなども主からの懲らしめと言えます。ここで私たちが注目すべきことは、主は懲らしめるだけであって、完全に滅ぼすことを決してなさらないということです。ですから、バビロンによってエルサレムが陥落し、バビロンに捕囚として捕らえ移される人々もありましたが、バビロン捕囚とされる期間は７０年と決まっていて、その後に再びエルサレムに帰還する望みがあり、まさにそのとおりになりました。ここに不義を行うご

自分の民に対する主のあわれみと恵みがあるのです。ですから、１５節では王位を追われ、その地位をダビデに与えられたサウルを引き合いに出しながら、ダビデの後にその王座に就く者たちは、サウルのように王位を追われ、他の者に王位を奪われないことを語っています。そして１６節で今一度「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ」と言われていますが、イスラエル王国がとこしえに続くということではありませんし、実際に今のイスラエルは王国ではありません。むしろダビデの家系からメシアであるイエス様が誕生し、ダビデの子孫であるイエス様が治める神の国は、まさにとこしえまでも続くということを意味しているのです。

私たちも、永遠までも続く神の御国の王座にイエス様がお就きになる時を信仰をもって待ち望んでいます。その時がいつかは分かりませんが、必ずその時が来ます。信仰による忍耐をもって、その時を待ち望みましょう。

５月７日（木）サムエル記第二７章１８～２１節

「神、主よ、私は何者でしょうか。私の家はいったい何なのでしょうか。あなたが私をここまで導いてくださったとは。」（１８節）

１８節において主の前に出たダビデの謙遜さが彼の言葉の中に表れています。彼は「神、主よ、私は何者でしょうか。私の家はいったい何なのでしょか。」と言います。まさに自分は取るに足らない存在であり、自分の家柄においても主が目をとめてくださるほどのものはないということです。２０節の「あなたはこのしもべをよくご存じです。」も、自分が取るに足らない存在であることを、主はよくご存じのはずだということです。それにもかかわらず主はダビデをここまで導いてくださったと言います。これは羊の群れを追う牧場から取り、イスラエルの君主としたこと（８節）主はともにいてダビデの敵を断ち滅ぼした（９節）またすべての敵からの安息を与えた（１１節）ことを言っているのでしょう。ダビデのように、私たちもこれまでの主の導きを思いめぐらすなら、主がどれほど私たちに対して恵み深くあってくださったかが分かることでしょう。しかし、自分のことを思えば、主は私たちのことを心にかけてくださる資格のない者であることがよく分かります。まさに「神、主よ、私は何者なのでしょう。」と言わざるを得ない者です。それでも主は見捨てることなく、ここまで導いてくださったことに心からの感謝をささげましょう。

１９節の「神、主よ、これが人に対するみおしえなのでしょうか。」というのは、ダビデの驚きの表現です。「このことがなお、あなたの御目には小さなことでしたのに。」というのは、１８

節の主のダビデ個人に対する導きのことを言っています。「あなたはこのしもべの家にも、はるか先のことまで告げてくださいました。」というのは、１２～１６節で語られていますダビデ王朝のことを指しています。特に、１６節の「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」と言われていることを指しています。

ダビデは、「主がご自分のみことばのゆえに、そしてみこころのままに、この大いなることのすべてを行い、」すべては主のみこころによってされたことを信じ、そのことを預言者ナタンを通して自分に知らせてくださったことを感謝しています。ここで私が強く思わされたことは、預言者ナタンを通してダビデに知らされたことは幸いなことであり、主に感謝すべきことでした。それと同時に、私たちにとっては喜ばしいことではなく、むしろ試練と思えるようなことであっても、なお主をほめたたえつつ、感謝をもって「あなたは、ご自分のみことばのゆえに、そしてみこころのままに、この大いなるすべてのことを行い」と言うことのできる信仰を私たちは持ち合わせているでしょうか。常に変わることなく主をたたえる信仰が与えられるように祈りましょう。

５月８日（金）サムエル記第二７章２２～２４節

「それゆえ、申し上げます。神、主よ、あなたは大いなる方です。まことに、私たちが耳にするすべてにおいて、あなたのような方はほかになく、あなたのほかに神はいません。」（２２節）

ここでダビデは主をほめたたえて、「神、主よ、あなたは大いなる方です。」と言い、次に「まことに、私たちが耳にするすべてにおいて、あなたのような方はほかになく、あなたのほかに神はいません。」と言い。主が比類なきお方であると賛美します。２３節からはイスラエルの民と主との関係を語ります。イスラエルの民の大きな特徴は、エジプトから、異邦の民とその神々から贖い出されたということです。それゆえに、イスラエルの民は神のものであり、神にある聖なる民だということです。そして、神は贖い出されたイスラエルの民をとこしえまでも主の民として立て、主は彼らの神となられました。それは神がイスラエルの民を最後まで捨てることなく、守り導かれたことを意味しています。しかも、イスラエルの民が主に従順な歩みをしていたからではありません。むしろ、彼らは主に背き、罪に罪を重ねる歩みをしていましたが、それでも主は決して彼らを捨てたり、離れることがありませんでした。ここにイスラエルの民に対する主の真実があります。これは、私たちの群れにおいても同じです。私たちもイエス様の十字架の血の贖いを通して、罪とサタンの支配から贖い出されました。その私たちをとこし

えまでも主はご自分の民として立て、主は私たちの神となり、ご自身の真実をもって見捨てることなく、常に守り導き、最後まで支え続けてくださいます。それとともに私たちも神に贖い出された神の民として、世にあっては神の聖なる民として生きているのです。自分が主によって遣わされているその場所にあって、主を証しする者とさせていただきましょう。

5月9日（土）サムエル記第二7章25～29節

「今、どうか、あなたのしもべの家を祝福して、御前にとこしえに続くようにしてください。神である主よ、あなたがお語りになったからです。あなたの祝福によって、あなたのしもべの家がとこしえに祝福されますように。」（29節）

18節から24節まで、ダビデは個人に対する導きとイスラエルの国家に対する導きの両方に感謝しながら、22節で「神、主よ、あなたは大いなる方です。まことに、私たちが耳にするすべてにおいて、あなたのような方はほかになく、あなたのほかに神はいません。」と、主をほめたたえます。

そして、25節で今度は「あなたが、このしもべとその家についてお語りなったことばを、とこしえまでも保ち、お語りになったとおりに行ってください。」と言います。これは、まさにダビデの信仰から出たことばです。これまで主が自らをどのように導いて来られたかを思い出し、主がほかに並ぶ神がないほどの比類なき大いなるお方であるので、お語りになったとおりに行うことができるはずですから、お語りになったことばを、とこしえまでも保ち、お語りになったとおりに行ってくださいと祈っています。私たちも、主なる神がどのようお方かを知り、それを信じているなら、みことばのとおりに行ってくださいと祈る信仰が出てくるはずです。26節では「こうしてあなたの御名がとこしえまでも大いなるものとなり」と御名が大いなるものとされ、あがめられるように祈ります。ただ単に自分たちのために主がみわざをなしてくださることを願うだけではなく、主がみわざをなしてくださる自分たちを通して主の御名があがめられることを願う信仰が私たちにもあるでしょうか。

27節では「あなたはこのしもべの耳を開き、『わたしがあなたのために一つの家を建てる。』と言われました。それゆえ、このしもべは、この祈りをあなたに祈る勇気を得たのです。」と言います。つまり、ダビデは主のために宮を建てるとの願いを持っていましたし、それはとても良いことのように思え、預言者ナタンも、「さあ、あなたの心にあることをみな行いなさい。主があなたとともにおられるのですから。」（3節）と言いましたが、主のみこころがはっきりと示されたなら、ダビデはそれに従い、決して自分の考えや願いに固執することはありませんで

した。これは、ダビデが主に対して自分を何度もしもべと呼んでいますが、あくまで王である自分は主のしもべであるとの自覚があり、常に主のみこころに従う備えができていたということです。私たちも、主のみこころが示されたなら、決して自分の考えに固執するのではなく、主のみこころに従う信仰を持たせていただきたいと思わされます。